

新刊紹介

岩本康志・鈴木亘・両角良子・湯田道生 著
『健康政策の経済分析：レセプトデータによる評価と提言』
(東京大学出版会, 2016年)

泉田 信行*

本書は福井県との連携により、国民健康保険・介護保険のレセプトデータ、特定健診・特定保健指導データを利用した分析とそれに基づく経済学の観点からの政策提言の試みである。

本書の分析で使用されている診療報酬明細書(レセプト)は公的医療保険制度の審査支払業務において利用されている。そのため公的医療保険加入者の受診行動は漏れなく把握され、個人の医療機関受診行動がすべて明らかにできる。本書に収録されている分析は医療(国保)と介護のレセプトを突合して分析していることが特徴である。このデータが利用できる優位性は第1章の医療・介護費の集中・持続性の分析、第2章の死亡前1年間の医療費・介護費、第3章の社会的入院の分析、において遺憾なく発揮される。

日本を代表する医療経済学者である4人の著者はデータの優位性のみならず、優れた分析手法を適用することで分析上の困難を克服し、さらに興味深い分析を進めていく。日本の公的医療保険制度は健康保険法・国民健康保険法をはじめとする医療保険各法によって、働き方や年齢によって加入する制度が異なるものの、全国一律なシステムとして形作られている。それゆえ、給付条件は制度間で差が無いなど平等なシステムである。しかしながら、個人が直面する制度に差がなければ制度の善し悪しを検証するすべがない。その困難を克服すべく、第4章では通所リハビリテーション施設の有無の地域差を用い、第5章では介護給付と介護予防給付の差を用い、第6章では特

定健診・特定保健指導の効果について分析を行っている。その後、第7章でのレセプトデータを用いた国保財政予測を経て、第8章で健康政策への提言と内容が進んでいく。

書き下ろし部分である第8章に著者のレセプトデータを用いた研究に対する展望が含まれている。レセプトデータの品質向上について焦点を当てた記述となっているが、著者の指摘する課題の多さに、その前途をやや悲観するかも知れない。

評者は、他方で、悲観的になる必要は無いという印象も持った。近年厚生労働省が政策を新規導入(ないしは修正)する場合に「モデル事業」が実施されることが多い。モデル事業は手上げ方式で実施されるため、そのままではやや躊躇はあるものの、著者が必要と述べている社会実験の環境とすることもできるかも知れない。モデル事業の実施地域においてレセプトデータを収集しておけば、政策の事前評価を行うことも可能であろう。行政の最前線に経済学者が積極的に接近し、歩み寄り、協働していくことで経済学の分析に耐えるデータが経済学者自身の手で構築され、分析結果が政策評価に活用されることを期待したい。

レセプトデータ分析の現状の到達点と将来の可能性を把握するために、医療・介護の分野に関心のある研究者は必読であるし、根拠のある政策を追求したい政策担当者も、いささか難解ではあるかも知れないが、挑戦すべき書と考える。

(いずみだ・のぶゆき)

* 国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部長